

学校文化成立の歴史社会学的研究

(教育臨床講座) 太田 佳光

Studies in historical sociology of school culture

Yoshimitsu OTA

(2021年9月1日 受理)

1. はじめに

わが国における学校や学級には、欧米諸国にはあまり見られない、ある特徴が指摘されてきた。とりわけ小学校・中学校の義務教育段階に、その特徴が顕著に現れているという。それは、学校や学級の「集団性」や「秩序」を重んじる事であり、例えばカミングスは、日本の学校を観察し次のようにその特徴を述べている。「日本の学校が最初に取りくむ課題は、いかにして学級の秩序を確立するかという問題である。(中略)日本の学級で重視される秩序は、毎朝、教師にあいさつすること、机の横に立って話すこと、静かに他の生徒や教師の話に耳を傾けること、集団生活のなかで協力し合うこと、などである。」(Cummings 訳書, 1981, p. 141)

また、北澤たちは、その共同研究「学校的社会化」に関する論考において、その特徴を次のように描いている。「授業の開始時には全員起立し、日直児童の『これから1時間目の国語のお勉強を始めます』などという挨拶に続いて、児童全員が『よろしくお願ひします』と独特の抑揚をともなった一斉発話をしながら礼をし、それができたら着席する」など。(北澤他, 2019, p. 1)

もちろん、地域により若干の差異はあるだろうが、現在も多くの学校で見られる光景である。また、学級活動を重要な教育的方法と考える「特別活動」の

指導要領には、次のように育成すべき、その児童・生徒の資質・能力が示されている。「集団活動の意義について理解し、行動の仕方を身につける」と。

本稿では、こうしたわが国の学校や学級の特徴を、学校や学級が持つ文化、すなわち学校文化にとらえ、それらの特徴がどのように成立してきたのかを、歴史社会学的視点から明らかにしていきたいと考えている。そこで、まず、こうしたわが国の学校や学級の特徴を、学校的社会化という概念から整理する。その上で、日本の学校制度が成立をしてきた明治期の教育政策に視点を移し、その特徴の成立経過を検討する。その後、こうした日本の学校文化が、戦後教育へと受け継がれていった経緯についても概観したいと考えている。

2. 日本の学校文化

(1) 学校的社会化の視点から

社会学の基礎的概念である「社会化」は、例えばバーガー等によって、次のように定義されている。「個人が社会の一員となるために学習する過程を<社会化>という。(中略)社会化とは、社会のパターンを行為に押付けることである。」と。(Berger 訳書, 1979, p. 62) すなわち、その社会の持つ行動様式や価値観を個人が学習し、社会から伝達される過程として、社会化は定義されている。そして、その社

会化の担い手の一つとして、学校があげられてきた。

北澤たちは、学校による社会化の過程を、次のように定義している。「『社会化』が、小さき存在が〈人間（ある言語共同体のメンバー）〉になる過程を指示する概念であるのに対して、『学校的社会化』は、小さき存在（すでに一定の社会化が達成されている存在という意味で『子ども』といってもよい）が〈児童になる〉過程を指示する概念」と。（北澤他, 2019, pp. 111-112）すなわち、主に家庭において、第一次的社会化を経験し、言語や基本的な生活習慣を身につけてきた「子ども」が、学校という新しい社会において「児童」になる、第二次社会化が行われる過程として概念化されている。

では、子どもを児童へと社会化する日本の学校がもつ特徴的な行動様式や価値観、すなわち学校文化とは、どのようなものだろうか。

（2）日本の学校文化の特徴

北澤たちは、学校で独自に見られる行動様式の特徴として、さらに、次のような事例を指摘する。「学校にふさわしいふるまいとは、たとえば、授業時には姿勢よく座り静かに話を聞いて、発言したい時にはピンと手を伸ばして挙手し、指名されたらはっきり『はい』と返事をして立ち、椅子を机の中に入れてから答える、クラスで移動する際にはきちんと整列し、体育館や運動場では素早く集合して体育座りをするなどのことである。」（北澤他, 2019, p. 112）これらの独特の行動様式は、先にカミングスが指摘をしたように、学校や学級での「秩序」を守る行為を身に付けることである。

そして、こうした学校や学級での「秩序」を身に付けていく過程を、イギリスのBBCが中心となって作成したドキュメント番組の中では「良い日本人になるための学習」として紹介している。⁽¹⁾一年間に亘って日本の学校を取材した彼らは、欧米では見られない学校・学級文化を、例えば小学校における道徳の時間、掃除や給食の時間の様子からその特徴を、他者への配慮を含んだ日本社会に求められる行動様式の習得と指摘している。また、中学校における授業態度や部活動への参加、制服の採用、儀式的様子などから、「秩序」を重んじた日本特有の文化

様式の習得として紹介している。

こうした学校的社会化は、日本中の小学校で、入学式直後から実施されているという。そして、その担い手は一年生の学級担任であり、学級での日常生活である。（北澤他, 2019, p. 112）では、こうした学校的社会化を可能にする、日本の学級の特徴を次に確認してみよう。

（3）生活共同体としての学級

柳は、日本の学級の特徴を、諸外国のそれと比較をして、次のように述べている。学級の特徴を日本固有のシステムであると指摘し、「むしろそれは生活集団とみるほうが、より適切である。否、生活集団というよりは、強固な生活共同体として存在しているといっても過言ではない。」そのために、学級をめぐる言説には「学級は一つの共同体であるべきだ」という規範性が付与されていると指摘する。例えば多くの学級論においては、共同体的性格を強化するような言説に満ちていると言う。「仲間づくり」「集団づくり」などがそれであり、「空間を共有するだけではなく、教師も生徒も生活を共有し、同じ活動をし、価値観をも共にするべきとする理念が強調されている」と指摘する。（柳, 2005, pp. 21-22）

すなわち、学級は日本社会を模したある種の生活共同体であり、そこでは当然の事ながら、他者との協調や協力が求められ、結果として日本社会に存在する社会的「秩序」を身につけるよう要請される事になる。

こうして子どもたちは、濃密な人間関係が求められる学級で学校的社会化をなしとげ、学校や学級の秩序を守る児童へと育っていく事になる。では、日本特有の特徴をもつこのような学校文化は、どのようにして生まれてきたのだろうか。その始まりは、わが国に近代学校制度が導入された、明治期にさかのぼることになる。

3. 明治期の学校文化

（1）今に続く学校文化

北澤たちが指摘した現在の学校文化の特徴を、別の角度から問題にしたのは、小沢である。小沢は、学校文化が、一斉行動と上位関係を基本原理として

成立しているとし、その問題を次のように述べている。

「学校といえば何を連想するだろうか。まずチャイムの響き。子どもたちは笛の音で牧童のもとにあつまる羊のように、一斉に教室に入る。号令、行進。『右向け右！進め！』などの軍隊用の掛け声は、学校の中で現在も生きている。点呼。『出席をとりまです』の声で教室の一日が始まる。教師は子どもの群れの統率者だ。」

「教師たちは統率・指導に関心を集中し、学校は一斉行動と上下関係を基本原則として、その関係原理を子どもたちに伝えていく場となる。」そして、その関係は長く持続していくとする。なぜなら「上下関係を空気のように当然とする学校の関係文化は、『なぜ』を受け入れない。なぜ制服を着るのか、なぜワンポイントの靴下はだめなのか」「理由は一つ、『そう決まっているから』だ。」

では、小沢が空気のように存在すると指摘した学校文化は、どのようにして生まれてきたのだろうか。それを読み解くヒントは、小沢が指摘する明治期に始まった「学校と軍隊との類似性」である。（小沢, 2003, pp. 45-48）

（２）兵式体操の導入

確かに学校には、学級での活動の中心となる班や、班長、運動会における行進など、軍隊を想起させる用語や活動が多く存在している。詰襟の制服を着た修学旅行生の団体を見て、欧米の人々が奇異な印象を受けるのは、よく耳にする事である。こうした、いわば日本の学校特有の学校文化の起こりは、明治期の学校制度の成立期にあるとされている。

近代化を急ぐ明治政府にとって、教育制度の創設は、緊急の課題であったと考えられている。事実、明治 5（1872）年には、学校制度の創設を意味する学制が發布され、全国各地に小学校が建設された。しかし、学費の高さや教育内容の不備などにより、就学率は低迷したとされている。このような学校制度を定着させるために大きな役割を果たしたのが、初代文部大臣、森有礼である。そこで、森の学校教育への施策を中心にして、その特徴を確認したい。

「近代国家の建設には教育が不可欠であり、人々

への教育こそが近代国家の基板をつくるのであるとの確信を、森は留学を通して獲得した」と権は指摘している。（権, 2018, p. 33）そして、文部大臣就任後、森は各種学校令制定や教育内容の近代化、就学政策の推進など、多くの施策を実現していった。その中に、近代軍隊の兵士訓練のための「歩兵操典」を援用したと思われる「兵式体操」を学校現場に導入していくことがあった。

白石は「兵式体操は師範が児童に規律にしたがう行動をさせるための手段であり、その目的は児童に規律にしたがわせる」事にあったという。（白石, 2018, p45）それは、結果として「身体訓練を通じての国家への忠誠心を身につけさせる事を目指す」事となる。（権, 2018, p. 34）つまり、森は、近代国家を支える人材の育成を目指し、その中心に「兵式体操」を置き、いわば、国家を支える集団意識の育成を目指していたと考える事ができる。

（３）学校文化の成立へ

森は、明治 18（1885）年に初代文部大臣に就任後、次々とその施策を実現していくことになる。すなわち、「男子中等学校で『兵式体操』が正式に導入され、運動会を奨励すると同時に洋装制服の採用を徹底した。」「さらに体育を制度として学校教育に位置づけ、兵式体操の振興に力を尽くした」（権, 2013, p34）ここで、運動会はすでに各地で実施されていたが、森により「兵式体操の要素が取り入れられ、明治 20 年代には全国的に普及することになる。」また、今日行われている修学旅行の起源は、「兵式体操に行軍の要素を取り入れ、明治 19（1886）年に実施された東京高等師範学校の『長途遠足』であると言われている」（太田, 2004, p. 164）

こうして森は、今日の学校文化の原型とも言える様々な施策を実現してきた。それは、「上司の命令や規則に服従し、集団への従属感を高めるものであり、体操、行軍、修学旅行、祝祭日儀礼の取り入れなど各種行事によって規律的身体性を学校文化の機軸にしようとする狙いをもっていた」と捉えられている。すなわち「森は様々な行事を通した『国民』形成装置を準備していき、その後も国民国家に相応しい『国民』づくりは続けられた」。 （権, 2018, p. 34）

森の作りだした学校文化は、その後の教育勅語制定などによる教育政策に取り込まれ、戦前の国家主義的な国民教化のシステムの中に効果的に取り込まれていったといえよう。

4. 学校文化の現在と未来

(1) 戦後の教育政策と学校文化

戦後の教育政策は、アメリカの主導のもと、民主主義的教育観の推進によって大きな変換を迎えることになった。戦前にわが国の学校教育に大きな影響力を持っていた教育勅語は、新しい教育観にそぐわないものとして、教育界から排除された。では、かつて教育勅語体制の中、国民教化のシステムに組み込まれていた学校文化はどのように変化していったのだろうか。

森が作りだした学校文化は、その多くが学校行事に組み込まれていた。そして、学校行事は戦後、「特別活動」の一環として継承されていく事になる。戦後最初の学習指導要領に「自由研究」として登場した「特別活動」は、「教科以外の活動」「特別教育活動」と変遷し、昭和43(1968)年に、特別教育活動と学校行事が統合され「特別活動」となっている。

(太田, 2004, pp. 169-173)

もちろん、国家を支える国民教化の中に組み込まれていた戦前の学校行事とは、その目標もまったく別のものとして設定されている。⁽²⁾しかし、重要な事は、運動会や修学旅行、儀式など、その形態はほぼ戦前の行事と同様のものとして引き継がれていた事である。それは、学校行事にとどまらず、制服の採用や、学校や学級での日常的なふるまいにも及んでいたと思われる。

(2) 隠れたカリキュラムとしての学校文化

民主的な人格形成を目指した戦後の学校教育の中で、その形態がほぼ戦前同様の学校文化が継承されていった事には、そこに「隠れたカリキュラム」としての学校文化の役割を見る事ができる。

田中は、日本の隠れたカリキュラムの特徴について、次のように述べている。「内容は、教師によって明言されることはすくないけれども、教育関係が成り立っているところでは、それは暗黙のうちに子

どもに了解されている。それは、たとえば、教師を尊敬するという態度、退屈さに耐える力、座ったまま沈黙を守るといった態度」「教育関係を存立可能にしている基本条件である。」と。(田中, 2003, p. 109) 北澤たちが学校的社会化として指摘した「子ども」が「児童」になる過程であり、そこに影響を与えるのが、学校文化としての隠れたカリキュラムなのである。

また、学校文化を「学校と軍隊との類似性」として批判した小沢は次のように述べている。「こうして軍隊のひな型のような学校様式ができあがると、行動様式もそれにならうのは自然の帰結であろう。『起立、礼!』『気をつけ、前へならえ!』などの号令や、運動会・体育祭での『進め、止まれ!』のかけ声のもとでの行進などは、その例である。命令を基盤とする学校の言語文化はそのまま、人と人の上下関係である。」(小沢, 2003, p. 50)

すなわち、戦前から継承されてきた学校様式や行事などに代表される学校文化の中に、規律や秩序の育成という隠れたカリキュラムが潜んでいるために、その影響力が今日も続いていると考える事ができよう。

(3) 学校文化のこれからは

隠れたカリキュラムとしての学校文化には、上下関係文化などとして、それを批判する立場が多い。それは、わが国の教育の基本原理に、子どもの人格形成が求められ、そこには、教師と子どもの交流や、ある意味での平等性が求められているからかも知れない。しかし、学校文化の功罪を考えるなら、その罪だけではなく、功にも目を向ける必要がある。

カミングスが指摘をしたように、学校文化に求められる「秩序」は、しばしば日本社会の美德として、欧米で語られる事がある。例えば、災害時にも、人々が秩序を守り、互いに助け合う光景などにである。まさに、欧米のメディアが指摘した「良い日本人になるための学習」が、学校文化の中で行われているからである。

ただし、こうした学校文化の現在は、揺れ動いているのも事実である。田中は、例えば教師と子どもの上下関係が、近代社会の位階的秩序という基本的

な構造によって支えられて来たことを指摘し、近年は、もう一つの社会構造、機能的秩序が強まっていると強調している。⁽³⁾ 学級崩壊や「ともだち教師」の出現などの現象がそれに当たると考えている。すなわち、これまで日本の学校教育を支えてきた、学校文化＝隠れたカリキュラムの喪失が起こっていると指摘している。⁽⁴⁾ (田中, 2003, p. 109) 学校文化の今後を考える事は、ある意味では、学校教育の存立意義を問い直す作業になるのかも知れない。

5. おわりに

わが国の学校文化の特徴を、「秩序」を重んじる文化として、学校的社会化の概念からその背景を整理した。その上で、日本の学校制度が成立をしてきた明治期の学校制度に視点を移し、森有礼の「兵式体操」の導入を中心として、その特徴の成立経過を明らかにした。さらに、こうした日本の学校文化が、行事や学校様式として、戦後教育へと受け継がれていった経緯について考察をした。

今後の課題としては、学校文化のさらに詳細な調査と考察が必要であると考えている。学校文化の現在の姿を、様々な視点から明らかにする必要がある。その上で、学校文化の一面的な批判に終わるのではなく、その功罪を十分に理解した上で、その活かし方を考える事が肝要と言えよう。

6. 引用文献

William K. Cummings, 1980, *Education and Equality in Japan*, Princeton University Press (=1981, 友田泰正訳『ニッポンの学校』サイマル出版会)

北澤毅他, 2019, 『学校的社会化の歴史と現在－「児童になる」とはどういうことか－』 2018-2022 年度科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書

Peter L. Berger & Brigitte Berger, 1975, *Sociology: A Biographical Approach*, Basic Books Inc., New York (=1979, 安江孝司他訳『バーガー社会学』学研)

柳治男, 2005, 『〈学級〉の歴史学－自明視された

空間を疑う－』 講談社

小沢牧子, 2003, 「学校文化に見る子どもと大人の関係考」 浜田寿美男他編, 『学校という場で人はどう生きているのか』 北大路書房

権学俊, 2018, 「近代日本における身体の国民化と規律化」 『立命館産業社会論集』 第53巻第4号

白石義郎, 2018, 「森有礼の二人の弟子－木下広次と嘉納治五郎の身体の西洋化－」 『久留米大学文学部紀要情報社会科学編』 第13号

太田佳光, 2004, 「特別活動の歴史」 高旗正人他編, 『新しい特別活動指導論』 ミネルヴァ書房
田中智志, 2003, 『教育学がわかる事典』 日本実業出版社

(注)

(1) NHK総合テレビで1990年に放映されたドキュメンタリー「ニッポン－欧米人のみた日本の戦後」の第6回「学校教育」で、イギリスBBCとアメリカA&Eが共同制作をした。彼らは、日本の学校教育の成果の一つとして、学校が日本人の望ましい行動様式や態度を育成していると指摘した。

(2) 現行の学習指導要領には、特別活動の目標として、以下の文言が示されている。「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。」

(3) 位階的秩序とは、近代社会において、国家と民衆、労働者と資本家などに示されている上下関係をさす。(国家や資本家が上位と考えられている。) それに対して、機能的秩序とは、使えるか使えないか、役に立つか役に立たないかなどの知の有用性によって決まるとされている。したがって、年長者の優位などの、伝統的な秩序は崩壊することになる。

(4) 首都圏の公立高校のエスノグラフィック的研究からは、学校文化の崩壊の様子を見る事ができる。4月の始業式の様子は、次のように描かれている。「まず、生徒が並ばないでしょ。で、先生たちの話

を聞こうという姿勢がないですね。(中略) すごい、カルチャーショック。」吉田美穂, 2007, 「『お世話モード』と『ぶつからない』統制システム」『教育社会学研究』第81集, 東洋館出版社